

明倫短期大学学会 月例研究会報告

平成26年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成26年4月24日の第67回から10月23日の第72回まで計6回が開催された。13年目を迎えた当学会の月例研究会で数えられた総演題数は72回で134となった。(通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント)。暦年の演題名等は学会HPを参照されたい。

第67回(通算第150回):平成26年4月24日(木)

(座長:飛田 滋)

8020と明倫短期大学

河野正司(明倫短期大学学長)

世界に類を見ない早さで、我が国の高齢者が全人口の22%に達して、超高齢化社会に突入したのは2008年・平成20年のことであり、現在世界一の長寿国である。我々誰もが望むのは健康を保った長寿社会「健康長寿」であり、そのためには自分の歯で咀嚼し、自分の口から食事をとることが最も大切であることが知られている。「80歳で20本の自分の歯を保ち、楽しく食事をしよう」を目標に、口の健康を保持・増進する活動「8020運動」が平成元年(1989年)、厚生省(当時)と日本歯科医師会によって開始されている。運動開始当初の8020達成率は7%程度であったが、運動が功を奏していることから現在では25%以上に達している。

急速な超高齢化社会の到来のなかで、摂食や発語といった顎顔面や口腔に関する機能が重要視されるようになり、健康維持に不可欠なものとして社会の中で認知されてきており、その中で本学の携わる領域は大きな使命を担っていると考えられる。

本学の先生方が、それぞれの立場から「8020と健康長寿」について考え、研究して、来年あるいは再来年にそれらが実を結び、このテーマのもとに研究発表が行えると良いと考えている。学会を構成する諸君それぞれの活躍を期待している。

第68回(通算第151回):平成26年5月22日(木)

(座長:木暮ミカ)

インプラントを用いた オーバーデンチャーの新システムについて

飛田 滋(歯科技工士学科)

一般的に歯科用インプラント治療の場合、最終的

な歯科補綴処置として欠損顎堤にインプラント体を埋入後、適切なアバットメントを選択しCr&Br形態の上部構造体を装着する方法が採られる。上部構造体の固定方法は主にスクリュー固定とセメント固定の2種類である。欠損領域が広範囲で実質欠損が大きい場合は、ボール型アタッチメントやバー型アタッチメントを固定元とするオーバーデンチャーが用いられてきた。

近年では、ロケーターシステムという新しい発想概念によるオーバーデンチャーが考案された。アバットメント部は円柱状にアンダーカットを呈する形態とし、そこにシリコンキャップが嵌合する構造を持つ。キャップは7種類あり、各々被覆するアンダーカット量の差違により維持力を正確に調整できる特徴がある。キャップの交換は専用治具により簡便に行える。

また、複数にわたるインプラントの場合、植立状態が最大40°の範囲内であれば着脱が可能であるため臨床的な有用性は高い。

今回はこのシステムを活用した本学附属歯科診療所における下顎両側遊離端欠損の症例を紹介した。

英国博士号への道

廣瀬浩二(歯科衛生士学科)

本発表は、博士号の取得に至るまでの道程について述べたものである。取得したのは教育学博士号(Edd in TESOL and Applied Linguistics)である。英国レスター大学の学生として7年間、Eddプログラムに在籍した。指導教授は、Dr Kevin Armstrongであり、年間2回以上会って直接指導を受けた。Dr Kevin Armstrongは、残念ながら途中、病気になり、Dr Agneta Svalbergが指導教授となった。

博士論文(55,000単語)の提出後に待ちうけているのが、Viva Voce(口頭試験)である。英国でHow to Survive Your Viva: Defending a Thesis in an Oral Examinationという書籍を購入し読んだが、不安は増すばかりであった。不合格者がでる試験である。指導教官のDr Agneta Svalbergが私だけのために、特別に、Mock Viva(模擬試験)を行ってくれた。大学近くの伝統あるホテルで行ったが、緊張は増すばかりであった。

いよいよVivaの時がやってきた。2013年5月8日(水)午後2時ちょうどに始まり、休憩を挟み、

4 時30分までの長時間に及んだ。内部試験官 (Internal examiner) は Dr Simon Gieve (University of Leicester), 外部試験官 (External examiner) は Dr Irena Kuzborska (University of York) であった。Dr Irena Kuzborska が外部試験官を引き受けてくれたおかげで、私の試験が設定された。両試験官とも私の博士論文を詳細に読み込んでいた。非常に厳しい質問の連続であり、生涯忘れえぬ 2 時間30 分であった。これ程までに学生を追ひこむ英国の学究の道に対する厳しさの体験は、私にとって宝となった。また、事務職の Ms Leigh Blair (Executive Clerk) と Ms Sharon Simpson (Programme Administrator) には、しばしば連絡をいただき世話になった。

第69回 (通算第152回) : 2014年6月26日 (木)

(座長: 大沼誉英)

摂食嚥下リハビリテーション 外来の設置に向けて 一心とからだの健康リハビリテーション

江川広子 (歯科衛生士学科)

野村章子 (歯科技工士学科)

河野雅之 (附属歯科診療所 Dr)

小林智美 (附属歯科診療所 Dh)

平成25年12月より本学附属歯科診療所では“摂食嚥下リハビリテーション外来”設置の準備をすすめ、平成26年4月の「摂食嚥下リハビリテーション診療報酬」改定に伴い、リハビリテーションを開始する運びとなった。

そこで、歯科診療所を定期的に受診している96歳の女性、“流涎とむせ”を訴えた患者に対して口腔・摂食嚥下機能低下の有無をスクリーニングテストならびにアセスメントを実施し、そこで得た情報から加齢による機能低下や心不全が関連しているのではないかと考えた。リハビリテーションを始めるにあたり、患者の症状に対応して歯科衛生ケアプロセスの一連の流れに沿って実施した。その内容は、患者の問題を解決するために歯科衛生士が介入する歯科衛生計画を立て、その後、計画に従って順次、実施する。歯科衛生介入後、患者の状態はどのように変化したのか、効果が上がったか、目標の達成はどうであったのかを判断した。

対象患者は、月2回の歯科受診で義歯調整と歯周

メンテナンスのリコール時に、リハビリテーションを繰り返した。対応して感じたことは、独居生活が長く高齢と聴覚障害をもっていることから、対人関係を築くことができなかったことが伺えた。このことから、患者対応に十分配慮しながら、受容の精神で暖かく接することを心がけた。患者にとってのリハビリテーション効果は、口腔機能等が向上していくことの喜びと、受診のために外出する機会が増えて、高齢者の閉じこもり予防とQOLの向上へとつながったのではないかと考える。

また、リハビリテーション中の患者との信頼関係を築くことができ、心とからだの健康リハビリテーションにつながった経緯を報告した。

第70回 (通算第153回) : 2014年7月24日 (木)

(座長: 内田杉彦)

CAD/CAMの最前線と教育への応用

植木一範 (歯科技工士学科)

平成26年4月よりCAD/CAM冠の一部が保険適用となり、今後の日本の歯科医療における当技術は、治療方法として不可欠なものになったといえる。一方、3Dプリンターや口腔内スキャン等の技術革新は途上にあるとされ、さらなるCAD/CAM治療の発展の可能性が示唆されている。本発表では、現状のCAD/CAM新技術について紹介し、教育への応用を考察した。世界に通用する一流の歯科技工士を養成している明倫短期大学としては、新技術が従来の歯科技工技術に置き換わるのではなく、CAD/CAM等の新技術を歯科技工のツールとして応用し、世界に負けない手技と機械の融合技術で高品質かつ高速に歯科技工装置を製作できるように研究と教育を進めていきたいと考えている。教育の中でも、知識やオペレーションだけでなく、運用や応用の可能性、品質に関する知識なども含めて、グローバルかつ将来を見据えた考え方ができる歯科技工士を養成していきたいと思う。今後は、カリキュラムの改変を含め、新技術に対応していく予定である。